

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：30110

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26590114

研究課題名(和文) 相談援助実習におけるOSCEの開発と教育的活用

研究課題名(英文) Development and educational utilization of OSCE for social work field practicum.

研究代表者

巻 康弘 (MAKI, Yasuhiro)

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：80614651

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：社会福祉士養成教育において、相談援助実習におけるOSCEと活用方法の開発を進めてきた。本研究で開発した3試験項目(インテーク面接、アセスメント報告、実習日誌記載・提出)によるOSCEを北海道医療大学相談援助実習履修学生290名に実施すると共に、実習指導者にOSCE結果を情報開示し臨床参加型実習のプログラム化を要請した。学生、評価者、実習指導者調査では、概ね肯定的評価がなされ、OSCEをクリアした学生の殆どが臨床参加実習体験を実施していた。

本研究により相談援助実習におけるOSCEと活用方法のフレームワークを構築することはできた。今後は、OSCEの諸要素の検証による精緻化をすすめる必要がある。

研究成果の概要(英文)：In social worker training education, the authors have been developing the OSCE as for social work field practicum and its utilization method. The authors carried out the OSCE with three examination items (intake interview, assessment report presentation, writing daily training report) to 290 students, who registered for social work field practicum at Health Science University of Hokkaido.

The examination results were disclosed to the field instructors, and the authors asked to develop an experiential clinical field practicum program. The results of surveys conducted by students, evaluators, and field instructors indicated that generally, the OSCE exam is fair, and most of the students who cleared the exam participated in the field practicum.

This study enabled us to build a framework of the OSCE and education application method in the social work field practicum program. In future, it is necessary to elaborate the OSCE by inspecting its elements.

研究分野：社会福祉学

キーワード：OSCE 相談援助実習 社会福祉士養成教育 実習前評価 実践力

1. 研究開始当初の背景

社会福祉士養成教育においては、より高い実践力養成が志向され、相談援助実習の重要性が高まっている。相談援助実習において実践力養成を行おうとした時、実習前に価値・知識・技術を身につけ、実習において自ら取り組むことが効果的である。特に技術の側面について言えば、事前教育において一定の技術を有していることが証明され、実習に臨むことが出来れば、限られた期間の中でも実践力を向上させることが可能となる。

この技術を客観的に評価する方法として、OSCEがある。OSCEは1975年にHardenらによって開発され、伴らが日本に紹介し、現在では医師及び歯科医師養成等で臨床実習前に共用試験が行われるなど医療分野で普及している客観的臨床能力評価試験である。

社会福祉分野におけるOSCEは、北海道ブロック社会福祉実習研究協議会での取り組みがあるが、概ねひとつの試験項目での実施となっており、総合的な技術評価方法としては、必ずしも十分ではなく、社会福祉分野における本格的なOSCEの開発が必要である。

2. 研究の目的

本研究は、相談援助実習におけるOSCE(以下、社会福祉士OSCE)とその活用方法の開発を目的とし、進めてきた。

本研究によって開発された社会福祉士OSCEを、社会福祉分野における技術力評価の方法として位置づけ、OSCE結果を実習前に、学生、実習指導者、教員の実習関係三者(以下実習関係三者)で共有することで、実習前に到達すべき技術力を明確化し、実習関係三者で実習前の技術水準についての共通認識を持つことにより実習内容の質の向上といった教育効果を期待する。

さらに、教育測定的利点以外に先行研究で指摘されている学習者の学習態度への変容や教員の教え方に有用なフィードバックが得られるといったその波及効果による利

点をも視野に入れた教育方法を同時一体的に開発する。

以上の観点から、本研究期間の研究により、下記の三点を明らかにする。

- (1) 相談援助実習におけるOSCEの開発を行う。
- (2) OSCEの結果を実習指導者に提供することによる効果を検証する。
- (3) OSCE及びOSCE結果の共有がもたらす学生の学習態度の変容を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 相談援助実習におけるOSCEの開発

OSCEシステムの構想を行い、相談援助実習の学習目標との関係から試験項目を開発するとともに、事前教育や、相談援助実習との関係で教員、外部評価者、実習指導者らにも意見を求め開発を進めた。

外部評価者を加えた評価者体制とするとともに、評価者研修の実施により、評価の標準化への取り組みを行った。

北海道医療大学の相談援助実習における実習前評価システムの一環として履修者290名を対象にOSCEを実施し、受験学生・評価者へのアンケート調査を行った。

(2) 相談援助実習におけるOSCE結果の教育的活用方法の開発を行った。

OSCE受験学生へのフィードバックの機会を設定した。

実習施設機関にOSCE結果を情報提供し、実習指導者への活用実態調査を行った。

教員、実習指導者、学生が参加する意見交換の場を設け、OSCEの内容妥当性について検討を行った。

4. 研究成果

(1) 相談援助実習におけるOSCEの開発。

OSCEシステムの構想と試験項目開発。

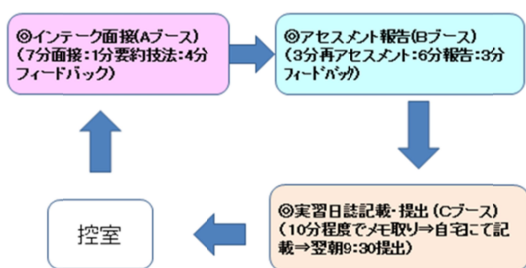
ジェネラリスト・ソーシャルワーカー養成としての社会福祉士養成教育において唯一の実習である相談援助実習前に実施する

OSCE であるとの位置づけを明確化するとともに、開発する OSCE が事前教育はもちろんのこと、相談援助実習において、臨床参加型実習体験を行わせるに足る内容となっているかという観点からの検討を行った。

開発の主要ポイントは、学習目標の明確化による試験項目の設定、試験項目の課題設計、評価表作成、評価ポイントの具体化などを社会福祉分野の特性に応じて開発した。

また、試験時間と課題設計、模擬クライアント・評価者体制と人員の確保、模擬クライアントの演技の標準化、評価者の標準化や運営体制を含めた実行可能性も見定めシステム全体の開発を一体的に進めた。

試験項目の開発にあたっては、学習目標として厚生労働省が示す「相談援助実習のねらい」と「教育に含むべき項目」の細項目が示されている北海道ブロック(2011)相談援助実習評価表の評価項目との関係で設定した。本評価表の中でも利用者との直接的、間接的にかかわりや、実習指導者の日常の攪乱によるリスク回避という観点を考慮し、実践技術・技能の習得に関する評価項目の中から、「インテーク面接」、「アセスメント報告」、「実習日誌記載・提出」の3試験項目による OSCE とし、試験項目に関わるブース(教室)を回って受験する仕組みとした。



各試験項目の課題設計の主要ポイントには、試験時間、試験場面の設定、学生への指示内容、評価表、試験問題の作成がある。全試験項目に影響する試験時間は、移動やフィードバックも含めて各試験項目15分とし試験項目毎の設定・指示内容、時間配分、主な評価内容と評価項目数は以下の通りである。

インテーク面接は、先行事例を一部改良し、相談機関に「事前に電話予約があった」クライアント役評価者とのインテーク面接を社会福祉士役の学生が実施する。本試験項目では、クライアントを受け入れる態度から、基本的なコミュニケーションスキル、面接技法に関する21項目(2014年度22項目)で確認するとともに、面接がクライアントにとって有用なものであったかについて6項目で確認する。試験時間は7分で面接、1分で要約、4分間で評価者からフィードバック、さらに評価者は3分で評価調整を行う。

アセスメント報告は、カンファレンスにおいて参加者を想定した評価者に口頭報告を行う場面を設定する。口頭報告にあたっては、事前に配布するインテーク面接や関係機関からの情報収集を含んだクライアントに関する事例集(分野の異なる3事例、A4,8頁程度)の中から1事例を当日指定し、カンファレンスの直前に簡単な追加情報(A4,半頁程度)を得て、その情報も含めた再アセスメント内容を報告する場面とした。本試験項目では、得られた(与えられた)情報から、「クライアント像」を人と環境の両側面からの情報整理、主観的ニーズの把握、客観的ニーズの分析が出来ているか、また現段階での「不足している情報の指摘」や当面の援助目標や必要情報へのアクセス方法について指摘が出来るか等とともに「口頭報告技術の適切さ」を21項目(2015年度まで20項目)の評価項目により確認する。試験時間は、3分で追加情報を含めた再アセスメント、6分で報告、3分でフィードバックを受ける。さらに評価者は3分で評価調整を行う。

実習日誌記載は、メモの取れないインテーク面接のあとに別の実習体験(アセスメント報告)を行い、その後にインテーク面接に関するメモを10分程度で取り、実習終了後実習日誌を適切に記載し、翌日の朝に提出が出来るかという情報記憶力及び実習態度につ

いて7項目(2014年度は、5項目かつ評価段階2段階)とした。

評価表の評価段階は、3段階評価とし、社会福祉士として卒業時に到達していることが望まれる水準を「3:適切である」とし、実習前・実習中・実習後での評価段階の水準は変わらないものとし、OSCEの合否基準は、3試験項目の合計得点の6割とし、不合格者には再チャレンジシステムを設けた。

また、OSCE時点で不十分な技術については、OSCE後の教育や相談援助実習を通して10割を目指していくものとして位置付けた。

評価項目の評価上のポイントは、学生周知時にも資料配布の上で説明した。学生、評価者、実習指導者にとっても、何が評価されるポイントかを示す上で重要であり、試行、実施結果を踏まえ改良を重ねた。

また、インテーク面接、アセスメント報告の試験問題(事例)開発は、外部評価者協力のもと、専門分野の異なる複数の教員により開発した。試験問題(事例)の行間から事例状況を読み取るための知識は、どの分野で実習する学生でも、最低限押さえておく必要があると考えられる知識に限定した。本試験問題(事例)は、インテーク面接6事例(事例毎に男・女バージョン)とアセスメント報告8事例(模擬事例1事例と試験事例7事例)を開発した。模擬事例は、解答例も含め学生に事前提示した。これらの事例開発は、ジェネラリスト・ソーシャルワーカー養成にとしての社会福祉士養成においてどの程度の難易度のアセスメントができることを求めるかを示す上で重要な取り組みであり、見直しを重ねた最終版を評価表や評価上のポイント等と併せて『社会福祉士OSCE』に掲載(アセスメント解答例は除く)した。

評価者体制と評価の平準化への取り組み。

評価者体制は、客観性を担保する為に外部評価者を加え、内部評価者10~12名、外部

評価者15~18名(うちクライアント役外部評価者5~6名)の協力を得た。

評価方法は、インテーク面接、アセスメント報告は、内部・外部評価者での合議制とし、インテーク面接でのクライアント評価、内部評価者が担当した実習日誌記載・提出の得点の合計を評価得点とした。

評価の平準化に向けた取り組みとしては、OSCEの3~4週間程前に実施した評価者研修を開催した。事前に、社会福祉士OSCEの考え方や各試験項目の概要、評価項目と何を評価するかを示す評価上のポイントなどを盛り込んだ社会福祉士OSCE実施マニュアル、試験問題(事例)、解答例を作成し、模擬評価用DVDとともに事前配布の上、事前評価を行った。評価者研修では、この評価結果をもとに評価のくい違いが生じた点に関する検討を行うとともに、本試験時にペアとなる評価者2名を1ブースとし、ライブロールプレイに対する模擬評価を行い、全10~12ブース毎の合議評価結果を全体で共有の上、差異が生じた点について意見交換し、評価上のポイントの具体化や評価段階の解釈の言語化により統一させる方法とした。

また、クライアント演技の標準化に向けては、事例概要や沈黙ポイントの統一を行った。

OSCEの実施と受験学生・評価者へのアンケート調査。

北海道医療大学相談援助実習履修学生290名を対象に、実習前評価システムの一環としてOSCEを実施し、平均得点率は概ね80%であった。

	満点	平均得点率	主な改訂内容
2014年度	154点	80.45%	
2015年度	165点	82.73%	実習日誌
2016年度	165点	80.60%	インテークアセスメント
2017年度	165点	80.97%	変更なし

受験学生及び評価者の評価によると、巻ら(2014)、巻ら(2016)ともに、「9割以上の学生が「OSCEの目的について理解」し、「OSCE形式でスキルが測られる」ことを肯定的に捉えているとともに、試験項目の課題設計の諸要素についても、8割以上から肯定的評価を得た。

(2)相談援助実習におけるOSCE結果の教育的活用方法。

OSCE受験学生へのフィードバック機会の設定。

社会福祉士OSCEを受験し、基準を達成した学生にとってのOSCE結果は、評価結果であるとともに、学生自身の自己課題を確認する資料となる。

こうした観点から、学生のパフォーマンスに対するフィードバック機会として、OSCE時にブース内で行われるフィードバック、事後的に内部評価者からの評価表返却時のフィードバック、実習指導担当教員とのOSCE時のDVD視聴を通じた振り返りを行った。

また、学生自身がクライアントと自らのパフォーマンスを振り返るとして、インテーク面接場面の録画DVDを視聴の上、プロセスレコードを作成する課題を設定した。さらに、OSCEで提出した実習日誌に、外部評価者からのコメントを加えたものと併せ、演習において活用した。

学生調査結果では、「定期試験と異なる特別な学習を」8割以上の学生が行っていた。

実習施設機関への情報提供と活用実態調査。

実習施設機関に対しOSCE結果の情報開示を行った。情報開示は、実習の1~2ヶ月前に実施する「ソーシャルワーク実習担当者会議」において、OSCEの目的、評価項目(評価上のポイント含む)、試験問題などの説明と共に、OSCE結果を含む実習前評価結果(評価

表・インテーク面接とアセスメント報告の際の録画DVD)を、実習参入にあたっての実習適格性を示す資料としての性格と、個別学生に応じた臨床参加型実習体験(同席・同行、試行、実施)を含んだ実習プログラム作成の要請を行う資料としての性格を持たせた。

実習後に実施した、学生調査結果によると、ほぼすべての学生が臨床参加型実習体験を実施しており、利用者に対して直接的な実施体験を行ったと回答した学生は6割を超える結果であった。

また、近藤・巻ら(2016:102)によるOSCE結果の情報提供の活用実態では、「OSCE結果は、回答のあった全ての実習指導者が何らかの形で確認して」おり、さらに、OSCE結果の情報を得ることについて、実習指導を行う上で「とても」「まあまあ」必要と考えている実習指導者は「7割ほど」であったが、実際の活用状況としては半数近くが十分な活用には到っていないのが実情であった。一方で、活用している実習指導者らは「個別実習体験内容の検討する上での資料として活用していることがうかがえる結果」が得られた。

実習関係三者(教員、実習指導者、学生)等の意見交換の場として、日本医療社会福祉協会学会における自主企画シンポジウム(集い)と、本研究の成果報告会の性格も含めた公開講座を開催し、OSCEの内容妥当性を軸に意見交換を行った。

本研究により、相談援助実習にOSCEを導入した教育システムモデルのフレームワークを構築することはできた。一方で、社会福祉士として有すべき技術水準に関する検証、評価の信頼性の検証、OSCEを含んだ教育システムを経たことと実践力養成との関連などの諸要素の検証などによる精緻化をすすめる必要がある。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

巻 康弘、川勾亜希奈、福間麻紀、近藤尚也、大友芳恵、鈴木幸雄(2014)「相談援助実習における OSCE の開発～実施結果と学生アンケート調査から～」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』21, 1-11.

近藤尚也、巻 康弘、川勾亜希奈、福間麻紀、松本望、鈴木幸雄(2015)「相談援助実習における OSCE 結果の教育的活用」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』, 99-103.

川勾亜希奈、巻 康弘、福間麻紀、近藤尚也、松本望、鈴木幸雄(2016)「相談援助実習にむけた OSCE の企画・運営」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』23, 79-86.

巻 康弘、近藤尚也、川勾亜希奈、福間麻紀、松本望、鈴木幸雄(2016)「相談援助実習における OSCE 試験項目の評価」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』23, 33-42.

[学会発表](計3件)

巻 康弘, 社会福祉実習教育の実情と実践力養成への取り組み～北海道医療大学における教育事例報告, 2014 年度全国社会福祉教育セミナー, 2014 年 11 月 2 日, 日本福祉大学(愛知県知多郡).

近藤尚也、巻 康弘、川勾亜希奈、福間麻紀、松本望、鈴木幸雄, 相談援助実習における OSCE の活用実態, 北海道医療大学看護福祉学部学会第 13 回学術大会, 2016 年 9 月 3 日, 北海道医療大学(札幌市).

巻 康弘、近藤尚也、川勾亜希奈、福間麻紀、松本望、鈴木幸雄, 相談援助実習における OSCE(客観的臨床能力試験)の試験項目, 日本社会福祉学会第 64 回秋季大会, 2016 年 9 月 11 日, 仏教大学(京都市).

[図書](計0件)

[その他]

巻 康弘(2015)日本社会福祉教育学会第 11 回大会 大会企画シンポジウム「実習『前』評価システムの検討と OSCE の試行」シンポジスト(日本社会福祉教育学会学会誌 14 号 pp111-141).

研究成果報告書(2018)『社会福祉士 OSCE』(科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究, 相談援助実習における OSCE の開発と教育的活用)(研究代表者:巻 康弘)

6. 研究組織

(1)研究代表者

巻 康弘(MAKI, Yasuhiro)

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号:80614651

(2)研究分担者

(3)連携研究者

近藤 尚也(KONDOU, Naoya)北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号:80733576

川勾 亜希奈(KAWAWA, Akina)北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号:70458123

福間 麻紀(FUKUMA, Maki)北海道医療大学・看護福祉学部・講師

研究者番号:70581867

松本 望(MATUMOTO, Nozomi)北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号:10758668

片山 寛信(KATAYAMA, Hironobu)北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号:10816797

大友 芳恵(OOTOMO, Yosie)北海道医療大学・看護福祉学部・教授

研究者番号:20347777

鈴木 幸雄(SUZUKI, Yukio)北海道医療大学・看護福祉学部・教授

研究者番号:20171267

(4)研究協力者

吉田 竜平(Ryuhei, Yoshida)